

緑のまち

—北国分だより—

第110号 2014.7.15 発行



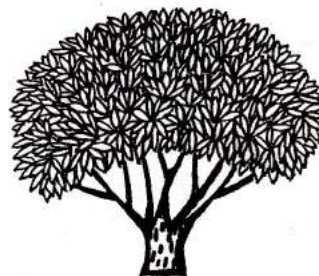
編集 北国分外環対策協議会
市川市北国分 2-29-12 越田方
Tel 047-372-8936
www.midorinomachi.net

第44回 北国分外環対策協議会 総会

日 時 平成26年8月2日(土) 午前10時～正午
場 所 小塚山研修所 第二会議室(二階)

議 事
年間活動報告 会計報告
事務局体制について
新年度の活動計画

「緑のまち」発行
バードウォッチング
森の音楽会(未定)
その他



話し合しましょう

私たちの緑のまちは、外環で“大型車優先”のまちに変貌しつつあります。長年使い慣れた大切な生活道路=通学路は廃道にされ、住民は大変不便な生活を強いられています。

外環工事に伴い、今困っていること、よくわからないこと、市や国に要望したいことなど、日頃考えていることを吐き出して、展望を見出しましょう。

手づくりケーキを用意しました。みんなで話し合いながら、これからの北国分についてみんなで知恵を出し合える総会になればと思います。是非お出かけください。

第 21 回森の音楽会 報告

風薫る 5 月の日曜日、今年で 21 回目となる森の音楽会が行われました。北国分や近隣の町から 150 名以上の方々が参加してくれました。

今回は、急遽小塚山の森の中ではなく、研修所での室内演奏会となりました。会場の変更に関しては、「残念だった。森の中で聞きたかった」などの声をたくさんいただきました。実行委員会としても、急な変更で多くの方々にご迷惑をかけたことと思いますが、小塚山の大切な仲間である野鳥を守ろうということで、やむをえず室内での音楽会としました。日本で数が少なくなっている貴重な鳥が巣をつくり、卵をあたためているという情報が入り、「野鳥は人の声、楽器の音などにも敏感に反応して、繁殖を止めてしまうことがある」と聞き、4月～7月の繁殖期間は森の中での音楽会はやめた方がいい、となりました。そして鳥への影響が少ない研修所に変更してもらいました。

今回の音楽会は、中国古来の楽器“二胡”をメインにして、ピアノ・ベースの演奏でした。静かな中に心に響く二胡の音色に聞き入ってしまいました。ピアノ・ベースとの演奏も互いに響き合い、ステキな音楽会となりました。会場の都合で、お子さんや足の弱い方にはゆっくりと聴くことができなかつたことは残念でした。また、緑の合唱団のコーラスやアンクルンの会の演奏も中止となり、楽しみにしていた方には申し訳ありませんでした。

21 回続いた森の音楽会は、多くの方々の協力や応援で続けられてきました。今までのカンパやアンケート、署名などありがとうございました。来年の開催につきましては、北国分外環対策協議会の総会でご相談したいと思います。



森の音楽会

緑陰に響く(とよ) む楽の音 我等呼ぶ

山本 愛子

ベースの音 指かるやかに 蝶の舞ひ

宇佐美 てつ子

二胡が鳴る 市民の森や 紫蘭炎(も) ゆ

三好 ひろし

外環道路も国の環境対策の根本的見直しが迫られています

国道2号線広島高裁判決（今年1月29日）より

広島市内の国道2号線沿道住民らが騒音被害などを訴えていた控訴審判決において、広島高裁は次のような判断を示しました。「道路に公共性があったとしても、沿道の住民などが受忍できる騒音のレベルは、昼間屋外で65デシベル、夜間屋内で40デシベルである」。

そしてこれを超える地域の住民などへの賠償を国に命じました。国は上告せず、これを受け入れました。

外環道路の騒音予測値は、既にこれを超えています。造る段階から受忍限度を超える道路は造ってはならないはずで、国の環境対策の根本的見直しが迫られています。

雷下遺跡出土の丸木舟

西畑 健一

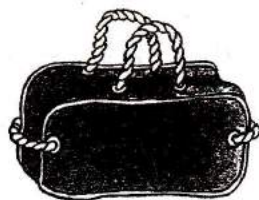
日本最古の丸木舟が、道免き谷津から出土しました。国史跡にも指定されている堀之内貝塚がある道免き谷津からは、丸木舟が出るだろうと前々から想定されていたのですが、外環の埋蔵文化財調査で、雷下遺跡から、意外や意外、日本で最古の7500年前（縄文早期後葉）の丸木舟が発見されました。雷下遺跡は国分操車場の先、道免き谷津が国分川に合流する手前に位置します。

6月29日、午後2時から、博物館友の会主催のカルチャー講演会が博物館の講堂で開催され、発掘調査を担当された県教育振興財団の服部智至氏から発掘当時のお話があり、その全容が見えてきました。丸木船は現在長7.2m、最大幅50cm、厚さ5~6cmで、両端が先細り。ムクノキ製。石器による加工痕が確認されており、火で焦がした痕跡もみられています。

発掘現地見学会の時は大雪で次週に延期されたのですが、その時も天候が悪く見学者は少なかったようです。出土の丸木舟についての調査資料も不十分で、今回の講演でかなり道免き谷津の、堀之内貝塚が形成される前の北国分地区の様相が明らかになってきました。中国分の北台遺跡（縄文前期の点在貝塚）は、すべて開発され宅地化されてしまいました。その前段の遺跡が今回の雷下遺跡だったのです。いずれにしても雷下-北台-堀之内-権現原と、4000年という長い期間にわたって、少なくともここ北国分に人が生活していた痕跡が遺物によって実証されたということです。

ハルビンで迎えた終戦

中村 盈子



終戦の日を私はハルビン（中国東北部）で迎えました。父が昭和20年8月1日に召集をうけ、見送りに家を出て、母の二人の妹が住んでいたところに行って、そのままになってしまったのです。私の住んでいたところは、蒙古と中国のぶつかったところで、そこにそのままいたら、もしかしたらこの世にいなかったかもしれません。また自分の家には一度も帰ることなく、日本へ帰って来ました。奉天まで行く最後の汽車が出ると聞いた前夜、ハルビンの駅に向かいました。1日かからず行ける所なのに、途中汽車は止まってしまい、翌日石炭車に乗りかえさせられ、夜やっとならば奉天に来ました。

それから1年間とにかく日本に帰れるのを待ってました。いろいろなことがありました。中国の中でも戦いがあり、中国軍と毛沢東軍と支配が変わるたび、お金が変わり、見回りがあって、ロシア軍であったり、赤軍であったり、中国軍であったり、そのたびに女子供は部屋の下に掘られた防空壕に隠れました。床下の空気穴から、息をこらして軍人たちのすきあらば家に入りなにか物をとろうとしている姿を見ていました。

21年の8月3日、住んでいた町が引き上げることになり、一人当たり「リュック」1つと千円だけ持っていいとわれて、8月3日、近くの空き地に集合し、違う奉天駅から汽車に乗りました。それは客車ではなく丸太を乗せるもので、車の下に板だけのもので、男の人たちが莫藪を立てて延ばして囲ってくれました。小さくなってないと、こわいのです。しかもよく止まり、その度にみんなからお金を集めてもっていったようでした。夕方やっと日本からの船が来る葫蘆島に着きました。そして一軒に一つずつ馬小屋があてがわれました。個々で1週間ぐらい生活し、いよいよ船が来ました。大人たちは喜んでいました。これでやっと日本に帰れると。私は一度も行った事のない日本に帰ることが悲しく、また召集された父の生死もわからず、母と一緒に離れていく陸地をながめてました。子供のころは船に永く乗ってたように思えたのですが、多分二三日ではなかったでしょうか。着いたのは佐世保でした。

広島駅の着いた時は、迎えに来てくれた祖父から「ここがおまえの父親の故郷だぞ」といわれました。記憶では、2本のホームが並び、左手の先に山があり、駅も見えず家も無く、細い木が1本だけ立っていました。すべて息絶えたと聞いていましたが、1本だけ木は生きていたのだと、そのとき思いました。

日本で落ち着いたのは山形県の祖父の実家でした。8月28日でした。小学2年から3年にかけての出来事、今から68年も前のことです。

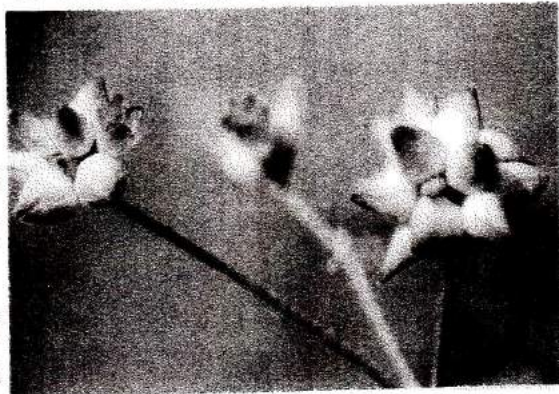
イテテテ…夏の花

谷口 浩之

梅雨空の下、水辺はハンゲショウが目を引いて暑い夏に向かっていきます。庭先のドクダミを整理しようと手を入れた途端、「イテテテ…」。手にトゲが刺さりました。ママコノシリヌグイでした。

「ママコノシリヌグイ」。いつごろ、誰がつけたかわかりませんが、なんて可哀そうな名前でしょう。ヘクソカズラなど一度聞いたら忘れそうもない花の名がありますが、この花もそのうちの一つでしょう。

“緑のまち”を歩いていると、目に留まりません。名前を知っていたので見たいものだと思っておりましたが、数年前、堀之内貝塚の脇の畑の端にあったのでカメラを持って行ったところ残念、除草剤がかけられ無残な姿でした。



知り合いにその話をしたところ、同じ場所周辺からでしょうか、採取して庭にあるからと言って小さな植木鉢に入れて自宅に持ってきてくれました。花をつけていたのですが、あまりにも小さく、写真には撮れませんでした、それがどうでしょう、2年後の今年、鉢から逃げ出し半畳ほどに広がりました。

葉は三角形で、葉柄は長く、茎とともに下向きの鋭いトゲがあり、そのトゲを他の植物にからみつけながら広がり、やぶを作っていきます。そのトゲが肌に触れると痛く、おもわず「イテテテ…」と声をあげたくなります。そばを通ると衣服にも付いてきます。

淡紅色の花は茎先にコンペイトウのような形で、10個ぐらい集まって、写真のように頭状につき、あまり開きません。

同じように三角形の葉を持ち、トゲのつきかたも似ているものにイシミカワがあります。丸い托葉が茎を囲むので、葉の真ん中を茎が突き抜けたようになっていて、容易に区別がつきます。花は淡い黄緑色で、固まって蕾をつけますが、口がわずかししか開かず、いつ咲いたのかわかりません。丸い苞の上に花被に包まれた丸い果実が秋になると青や紫色になり、それが大変美しく見応えがあります。

実生から生えて庭にあったのが、ようやく悪戦苦闘して退治したばかりなのに、今度は、ママコノシリヌグイに悩まされるとは…。両者ともに庭に植えるものではありません。写真に撮ったらこれも整理しよう。

散歩カメラマンの悩みは尽きません。

□探鳥会報告□

日時：平成 26 年 4 月 29 日（祝）

天候：曇り

参加者：谷口夫妻 佐々木 菅野 家住 新谷

鈴木 松本 梅原 小山 飯山 平

中島 高柳 今井 越田 鈴木 福田

三好 村岡 計 20 人

確認された鳥：ヒドリガモ コガモ キジバト ゴイサギ

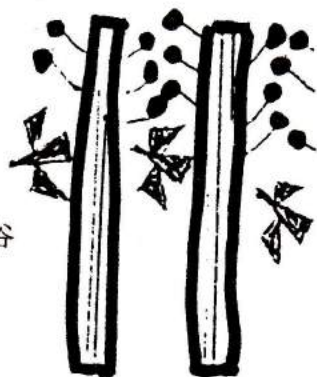
アオサギ コゲラ ハシボソガラス ハシブトガラス

ツバメ シジュウカラ ヒヨドリ ウグイス メジロ

スズメ 計 14 種

コメント：あいにくの曇り空で、期待のキビタキ、センダイムシクイは声もありませんでした。しかし、メジロ、ウグイス、シジュウカラの囀りを新緑の中で楽しく聞きました。じゅんさい池では、珍しくゴイサギがおりました。

村岡幸生



バードウォッチングに参加して

中島 行雄（平田）

まず、自転車で小塚山緑地に着いて、いっぱい緑にびっくりさせられました。ただ、たたずんでいるだけで心が休まる感じでした。北国分から中国分にかけて、ほんとうに自然がよく残されていますね。大切にしなければと思います。

鳥の姿はあまり見られなかったけれども、ずいぶんいろいろな鳥の声が聞けました。それぞれの鳴き声を教えていただきとても楽しかったです。どんな鳥の声かがわかると、その姿まで見えてくる気がしますね。

また、小塚山で教えてもらったのですが、人の足音さえ鳥をおどかすとのこと。そんなところに騒々しい外環道路がつくられつつあります。全く困ったものです。

じゅんさい池の近くでは、キジバトが鳴いているのに出会いました。私には暫らくぶりのこと。その鳴き声はなにか優しく、母や弟たちと過ごした幼いころを思い起こさせます。バードウォッチングも今シーズンはこれで終わり、また秋からとのこと。けれども次回からはできるだけ毎回参加させていただきたいと思います。秋が来るのが楽しみです。

市川の歴史と文化をさぐる旅



小栗山 敬子

千葉県退職教職員の会の今年の交流旅行は市川が担当して、他市から参加する方々に市川の文化や歴史を紹介するために、4月8・9日に行われました。

一日目は、軍事史研究家の高野邦夫さんの案内で、市川市の北の方面、国府台・真間・須和田地区を巡ってきました。国府台は、現在は多くの学校が立ち並び学園都市といわれているが、戦前は旧陸軍教導団が置かれ、市川は軍都であったにもかかわらず地域の案内書には一言もふれていないのはおかしいのではないかというこゝろが言われました。伏姫桜で有名な真間山弘法寺の中にも忠魂碑や、若くして戦死した少年兵のお墓など、戦争の遺跡がひっそりと残っていました。その後、高野先生の案内で万葉の手児奈伝説が残る真間を散策し、須和田公園の忠魂碑について説明を受けた後、一面の芝桜が咲き誇る郭沫若邸を見学しました。

二日目は、南の行徳方面を巡ってきました。行徳は江戸時代は塩の産地として栄え、江戸へ塩を運ぶために水運業が発達し、また成田山詣での人々の利用も多く、船着場として賑わっていた名残を感じることができました。市川案内人の方々の説明を受けながら、稲荷神社をスタートし、行徳船の船着場だった常夜灯見た後、徳川家康が鷹狩に行くときに通ったという権現道を歩きながら、周りにあるたくさんのお寺を紹介していただきました。行徳は昔から「戸数千軒、寺百軒」といわれるほどたくさんのお寺がありますが、中でもしだれ桜の見事な円頓寺、松尾芭蕉の句碑が残る法善寺、珍しいキリシタン灯籠が残る妙覚寺など、歴史を感じさせるお寺で、再発見したことがたくさんありました。最後に大きな山門と鐘楼がある徳願寺で住職の奥さんのお話を伺った後、本堂や裏の庭園まで見せていただきました。さすがに三百年以上の歴史を感じさせる威風堂々たるお寺さんには圧倒されました。

途中で、昔ながらの旧家の面影を残す田中邸を見せていただきました。土間の玄関や囲炉裏、昔から伝わる襖絵などがあり、行徳小で学校生活科の学習で見学させていただいた時も子どもたちに昔を伝えたいと喜んで話してくださったことを思い出しました。

徳願寺の方や、田中さんたちを中心に「行徳てらまち会」として行徳の歴史や文化を守り、次の世代へ引き継いでいこうといろいろな活動をしていることは素晴らしいと思いました。市川の北と南ではそれぞれ歴史や文化に特徴があり、まだまだ知らない良さがたくさんあると思うのでこれからも再発見の機会をつくっていききたいものです。

緑のまちあれこれ

- 北国分のまちは、森の音楽会の季節から、酷暑の対策協議会総会の時期に季節は移ってきました。まちを歩いていると、あちこちに壁の塗装や建て直しの家に出会います。30年以上そのままの家が建て替えられ、人間もその時間だけ歳をとってきているのでしょう。昼間は若い人は勤めに出掛けて見あたらず、若い夫婦が少なくなり幼児の数が減ってきています。日本中どこでも見受ける現象なのかもしれませんが、“緑のまち”でも同様で、日曜日や休日にも青少年を見かけることがなくなってきて、駅でもスーパーでも中年以上の品のいいお年寄りばかりが目につきます。なんとか若い人たちが目立つようなまちにしたいものです。
- 「このだい九条の会」がすすめてきた「憲法を守る」署名にご協力いただき、ありがとうございました。みなさまから寄せられた大切な署名は、5月7日に3,075筆を国会にとどけました。安倍首相は、自公協議を加速させ、7月1日に「海外で戦争する国」にするための集団的自衛権の行使を閣議決定しました。この解釈改憲に反対する声は日増しに大きくなってきています。「このだい九条の会」でも、この声をさらに大きく広げるための宣伝活動に取り組んでいきます。 (松林)
- 政治家は、なによりもやりたいことはやりたいように法律をつくって、立憲自由主義国家であることを示そうとする。市民というか当たり前の普通の人、そんなに深く考えることもなく、その日その日をなんとなく過ごせばよしとしている。だけど明日はもう少しよくなるかとは思っている。かつて無頼漢が大手を振って歩いていた時代があった。密告者に恐れおののく世の中を復活させ、権力を維持しようとする時代錯誤の政治家のひとりよがり許してはならない。権力者は必ず法を制定する。法を見れば社会の現状がわかる。法のない世界とはなんの犯罪もない社会か、法を成立させる意思のない社会。マグナカルタも日本国憲法も、つまりは法治国家の理念の上に制定された基本法であり、はるかなものへの意思と祈りの結果、制定されたものなのだ。

■ 編集後記 ■ すべてが変わり目に動いています。ワールドカップは予選敗退に終わりましたが、政治は集団自衛権問題の閣議決定で、戦後の平和民主主義が転換期を迎えようとしています。北国分がこれからどのように動いてゆくのかは、私たち住民の意思によるものでしかないのです。